

だ、木曾八景の一つだからと云ふのではない、狭い谷の底、木曾川畔に延びた福島町は、高い西山に夕陽を遮られて、薄暗い靄の中にボンヤリと暮れて残つた雪のみが白く見える。

駒ヶ嶽の麓に、回らした塀の様に重なり合つた一連の柴山の枯れた頂を照した日が、すつと上に逸れて、西の空が黄金色に輝き始めると、低い峰が黒くなつて、駒ヶ嶽を照す日が益々赤くなつて来る。

中空八千尺の半から上は、雪計りて積上げたかと思はれる曖々たる巨峰が、西に向つて紅光を浴びた様、譬ふへきものを超脱してゐる、彼自身は太古より偉大なるものゝ一つだ。

巔の凍つた雪の面が、硝子板の様にキラ／＼と光る、全山一色の如く見えて、數知らぬ壁が現れ、前山が暗くなるに連れて、色ば眞紅になり、山が近くなつて大きく中空まで聳へた。

右の頂が左の凹部を薄暗くして、其後から輝く峰が顔を出し、中腹に起つた小さい凸出が、下からさす陽光を遮ぎつて、影の上に延ばして居る。始め一片の綿の様に、何か見えると思ふ間に、四方に延びて、帯の様に中腹に横ると、紫の影が雪に落ちて、闇は山の三分の一程まで迫つた。

雲が下に擴がつて麓を包む頃、夕陽は最後の一闪を頂に射て、頓に其所らが暗くなつた。

ア、と吾に返ると、持つた筆は凍り、手はこゝゑて、半成の畫面が闇に白い、寒風に襟を襲はれながら、三脚を提げた時、今一度駒ヶ嶽を見ると、餘れる光に、山は白く、暗藍の空に夢の

様、ホツと大息して下を見ると、電燈が赤く光つて居る。

冬の朝

鈴木月仙

先づ、思ふ通りの圖取りが済んだので、ヤマトを一本點けて、スーと深く吸ひ込みながら、出來た下圖と、對景とを見比べる。

小川に沿うた小さい藁屋の、やんわりと雪を頂いた具合、其向側からヒヨロ／＼と、小川の方に差し延べた梨の木、瘦枝の恰好、姉様被りの中から白い半面を見せて、何か洗物をしてゐた小娘の風姿……

冬の弱い日射が、漸くほんのりと、氣持よく暖かくなつて來た。白牛の群れのやうに南から北に走つた連山は、淡いコバルトに霞んで、その南端の奥に高く群山を睥睨してゐる××山の頂は、ポーと深碧の空に消え入つてゐる小娘は頓て洗物を兩手に下げて、何も知らずに家に返つてゆく。鍋だか釜だか、ピカリと日光に反映した。ふくやかな手の甲は、冷たく眞紅になつてゐるだらう。メレンスか何かの紅い帶、紅い襟、その愛らしい後姿、何となく懐かしい心を唆つた。

つい先刻から梨の木に來て、小娘の顔をでも覗き込むやうに、小さい首をクリ／＼させてゐた鳥は、スィーと悠く飛んで、下方の小川に臨んだ白楊の木に移つた。

風の旅

神戸 津川 清平

郷里の風光案内にはあらねど、大和地方への極月の旅日記を水